



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Friday 5 November 2010 (afternoon)

Vendredi 5 novembre 2010 (après-midi)

Viernes 5 de noviembre de 2010 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCCIONES DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

1.

新聞に醜聞として私たちの関係が報道され、また新聞記者が、執拗に再婚の相手のことを尋ねたあげく、米山みきに対する私の感情を問うたとき、私が答えた言葉に偽りはなかった。極度に潔癖な、いくぶん感傷的な文学者のように、いつの場合にも虚偽を語ることを罪悪だとは私は思っていない。自己の生命や基本的権利を守るためには、人は虚偽を言つてよいし、嘘一つ言わぬ人間など、現実には存在しない。だが、「おそらくは愛していた」という発言が、性急な人にはどんなに曖昧に聞こえようとも、私の精神状態を伝えるべきもつとも適切な言葉を選ぶなら、いまも、とつさに言つたその一句を繰返すことになるだろう。

5

私には理解できぬ、変節にひとしい性格転換が、のちほど米山みきにあらわれた。しかし、すくなくとも、それ以前は、聡明で直観力に富む、立派な女性であったと信じている。私には欠けているものを、豊富にそなえていた。私になかったもので、彼女にも欠けていたものは、あの〈若さ〉ぐらいのものであった。

10

翌日、私は講義を二時間すますと、すぐ家に帰った。玄関に迎えた米山みきにカバンを手渡すと、私は妻の病室に入った。いや、その前に風邪気味の喉をうがいしに、洗面所へいった。米山みきが、手拭を手籠に入れて、待るように横に立った。私が病室へむかう廊下を歩みだしたとき、家政婦の伏し目の顔があげられ、一瞬、頼りない少女のように顔を皺くちやにした。しかし、そのときにも、なぜかまだ私は自信を持っていた。

15

病室は奥の小庭に面している。しかし、庭は荒れ、部屋には日の光はなかった。光の代わりに、その病室に瀰漫しているものがあつた。それは癌患者特有の、はなはだしい靡爛臭だつた。静枝の吐く息は、いささか下品すぎる比喩とはいえ、あえて言うなら、悪酒に悪酔いした翌日、宿酔の日の排泄物の臭気に似ていた。

20

「近ごろ、お元氣そうになりましたのね」 嘎れ声で、私が言うべき言葉を妻が先に口にした。「お顔の色がよろしいようです」
「お前のほうはどうかね」

25

病床全体を視野におさめたとき、枕もとの小輪の花が、意外に鮮明だつた。なんとという花なのか。植物の知識に乏しい私にはつまびらかではなかった。またしいて尋ねるほどのことでもなかった。私は、自分の健康が、たしかに妻の指摘どおり順調であることを、学会開催の責任と雑務から解放された気安さと関連させて説明した。もつとも、そんなことに静枝が興味をもっていないのは、百も承知のうえだつた。妻には一種家禽の躰とでも名付くべき身振りがあり、彼女が健康であつたころは、私のするやや専門的な時事問題の解説や、学内の人事異動などに答えて、礼儀正しい返事をしたものだつた。それが人の道になつておりましょう、とか、いろいろなこ

30

とがございますのね、とか。妻は私の話などまったく聞いていなかったのだが、傲慢ごうまんで、また長い教育者生活の中で、教授者たる自分の意見を人はかならず傾聴するものだと思いきんでいたために、そのころの私は、静枝がただ口先だけであくびを噛かみ殺していたことに気づいていなかった。しかし、妻の痼疾こじつの絶望化するにつれて、妻はもう演技をする体力—そう、ちよつとした思いやりにすら、人間には地位や余裕や体力が必要なのだ—を失ったのだった。

米山みきが、襖ふすまの外から、何か用事がございましたら、と声をかけた。足音はしなかったから、もしかすると初めから廊下にたたずんでいたのかもしれない。

「お茶をもってまいりますでしょうか？」

「米山さん」と妻が痼かを無理におし殺したような声で叫んだ。

40 「香をたててください。お部屋の香がきれたようだから」

「はい。すぐ入れ換えます」足音が廊下を遠ざかった。

「わたしのためなら別にかまわんさ」と私は言った。

「わたくしは幾ら香を焚たいても、香水をふりかけても、もう鼻がきかなくなりました。膿うみの臭いもしない代りに、なんの匂いもしません」

45 顔をあらぬ方にそらせるとき、それは能面のように不気味に光り、俯ふせられれば、はや、それは一箇の死面だった。

(高橋和巳 『悲の器』 一九六二年)

(注)

醜聞しゆうぶん よくないうわさ。聞き苦しい評判。

侍はべらにひかえる。

瀟漫びまん 一面にみなぎること。

靡爛びらん ただれること。

つまびらか 詳しいさま。

家禽かきん 家で飼う鳥の総称。ニワトリ・アヒルなど。

痼疾こじつ 久しく治らない病氣。

痼か 感情が激しく怒りやすいこと。またその性質。

2.

海

私はページをめくる

海が私の前に開かれる

潮騒が私の鼓動にかさなる

光がはげしく私をせきたてる

5
すると不意に一羽の白い鳥が飛立つ

そのあとの私を風が吹きぬける

物の影が私の背に落ちる

はばたきは絶え

既に遠ざかったものを

10
うたはくりかえされ

その波間に

私の眼は幻影をみている　しかし

やがて消えのこる日のへりに

かすかにふるえる私の指先がかかる

15
そして　幾ページかが過ぎる

私のかげがえのない本の中で

(金井直　「海」　『飢渴』　一九五六年)